

第
3
章

～
救世主

夢にまで見た「包あん機」

深夜、今市にある加藤鉄工所に到着しました。

道はすいていましたし、虎彦さんがめいっばい車を飛ばしましたから、電話を受けながら1時間もかからなかったと思います。

近所にあるほかの家は寝静まっているようで辺りは真っ暗でしたが、加藤鉄工所には煌々と明かりがっています。闇夜に浮かぶその光は、なんだか、私たちの到来を待ちわびているかのように思えました。

車の音を聞きつけて加藤さんたちはすぐに表に出てきました。彼らもきっと虎彦さんと同じように、はやる気持ちを抑えられなかったのでしょう。

加藤鉄工所は古い木造の一軒家で、手前には工房や物置、駐車場があり、その奥に加藤さんたちと、彼らのご両親が暮らす自宅があるようでした。

「こんばんは。夜分遅くにすみません。いてもたってもいられず、来てしまいました」

虎彦さんが神妙に言うのと、祐壽さんは黙ってうなずきます。久さんは少し恥ずかしそうに頭をかきながら言いました。

「こちらこそ、すみません。夜も更けていたのに、どうしてもお知らせしたくて。どうぞこちらへ」

工房の中に入ると、広い倉庫のような空間が広がっています。

壁には見たことのない道具類が雑然と並び、窓際に置かれた作業台にはこれまたはじめて目にする工具や機械がところ狭しと置かれています。

部屋の片隅には、材料なのか廃材なのか分からないような鉄板や木板が置かれ、その脇にあるテーブルの上には修理途中の鉄砲などが置いてありました。

部屋の中央には、ひときわ大きな黒い機械が。

「これが饅頭製造機……？」

話には聞いていたものの、実際に目にしたのはこのときがはじめてでした。想像よりも大きい。長さにして2m、高さ1m30cmほどあるでしょうか。

「ずいぶんと立派な機械なのね」

「うむ。これは包あん機だ」

「ほうあんき？」

「あんを包む機械だから、包あん機」

「ああ、なるほどね」

饅頭製造機という堅苦しい名前より、ずっと身近に感じます。一見したところ、この大きな黒い塊から、どのように丸いお饅頭ができるのか、私には分かりません。

「こんな大きな機械で丸い小さなお饅頭ができるの？　ちよつと想像がつかないわ」

「この機械には、左右に3本からなる円錐形のローラーが付いている。ここに生地を入れると回転しながらこれを引き込んで、棒状になった生地が出てくるんだ。左右から出てくるその2枚の生地 of 真ん中にあんこが落ちる仕組みになっていて、それを今度は、回転するカップをかたどった二つの円盤で丸く成形して饅頭をつくるんだ」

私に説明してくれたのでしようけれど、その言い方はまるで、自分自身に言い聞かせているようです。理論は間違っていない。機械も完成した。これならきつと饅頭ができるはず。それも手づくりのような饅頭がきつとできる、と。

早速、虎彦さんは持参した饅頭の生地とあんこを機械の所定の位置にセットしまし

た。虎彦さんが言ったように円錐形をしたローラーが付いている左右2カ所に生地を入れ、そのローラーのちょうど中央部に位置するポケットのような部分にあんこを入れます。

「これでよし、と」

あとはスイッチを押すだけです。ボタン一つでこれまでの苦勞の結果が見えるのですから、そこにいる誰もが緊張していたと思います。

「いくぞ」

虎彦さんがスイッチを入れました。

大きな黒い機械が、グイーンという音を立てて動き始めます。加藤さんたちは固唾かたずをのんで見守り、私もその瞬間を見逃さないよう大きく目を見開きました。

すると――。